

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2391100308		
法人名	社会福祉法人フロンティア		
事業所名	グループホームみなとの憩		
所在地	愛知県名古屋市港区名港一丁目6番1号		
自己評価作成日	令和4年1月1日	評価結果市町村受理日	令和4年6月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;jiyosyoCd=2391100308-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;jiyosyoCd=2391100308-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人福祉サービス評価センター
所在地	名古屋市中川区四女子町1-59-1-902
訪問調査日	令和4年4月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昨年の4月から法人が変わっているが、フロアの職員は殆ど変わっていないことから、今までのグループホームでの暮らしの継続が出来ている。法人が変わったことによる不安や心配の軽減にも繋がっており、ご家族様との信頼関係にも繋がっている。

早朝、東側の大きな窓からは朝日が差し込みホームの向かい側にある神社の緑とのコラボレーションが楽しめる。また、その神社や近くの公園が散歩コースとなっている。フロアでは体操や食事の盛り付けや後片付け、洗濯物たたみ掃除など家事活動を日課としている。また、おやつレクやパズルや編み物などの個別レクも行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは特別養護老人ホームを併設した複合型施設内にあり、2021年4月から運営法人が、社会福祉法人フロンティアに交代した。ホームの名称も「グループホームみなとの憩」に変更したが、管理者や職員、そして、利用者もそのまま引き継がれ運営上の大きな変化や支障は見られず、家族の不安や苦情もなかった。今年度は感染拡大の影響で力を入れている地域との交流が出来なかった。コロナ禍後には管理者は認知症のキヤラバン・メイトで地域の人々への認知症理解促進のための講座開催をめぐしている。法人の事務長は、元県会議員で現在は地域の消防団員でもあり、地域情報も収集できており交流の拡大が見込まれる。外出は社会との繋がりを維持するため、重要であり、コロナ禍においても自由に出来るように、玄関の施錠は行わず、見守り対応に取組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	令和3年4月に既存の施設をそのまま新規申請し、新たな理念を掲げることなく過ぎてしまった。この機会に新たな理念を掲げた。まだ共有や実践につなぐことはできていない。	法人が変わり、幹部職員が話し合いを重ね独自の理念「笑顔・安らぎ・憩い」を策定した。笑顔と安心を届けるサービスを行い、利用者が自宅と同様に、安らいで、憩いの場になるように努力している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人の事務長が地域で暮らしており地域の一員となっている。法人が変わり地域とのつながりを再構築する必要があるが、コロナ禍である現状で日常的な交流は図れていない。近くの神社や公園に散歩にいかれ、地域の方と挨拶を交わすなどの交流は図れている。	「運営規定2条」に、施設の運営方針として、「家庭的な環境の下で、地域住民との交流を持ち、日常生活を送ることができるように配慮して行う」を掲げ、積極的に交流を行っていたが、コロナ禍のため、近隣の神社、公園の散歩などでの挨拶程度の交わりはあるが、祭りや町内行事の参加などは自粛している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の管理者が、認知症介護指導者であり、また認知症キャラバン・メイトである。その実践はあるが、地域の人々に向けて活かされていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、書面での開催となっており、評価への取組や状況とへの報告や話し合いができていない。	運営推進会議は2ヶ月に1回、利用者家族、自治会会長、民生委員、いきいき支援センター管理者、ホーム職員などの参加で開催していたが、今年度はコロナ禍のため感染予防対策として書面で行った。意見などは、電話や書面での取り組みとなった。	今年度はコロナ禍のため運営推進会議は書面のみでの開催となったが、ZOOMなどでの開催も検討されたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	区の保護係や、いきいき支援センター等、入居の相談や入居されている方の報告を適時行っている。	コロナ禍の制限がある中、管理者は市との連携を積極的に目指して対応している。申請代行などの機会があるごとに市の窓口や、いきいき支援センターを訪問し良好な連携関係づくりを目指している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	フロアや施設の玄関のドアは施錠をしない介護を行っており、利用者は自分の意思でフロアから出ることができる。毎月コンプライアンス委員会を開催し、その場で身体拘束の有無について話し合っている。	玄関施錠は行われなため、利用者はいつでも自分の意志で外出できるが、コロナ禍のため外出はされていない。「重説・運営方針」に「身体拘束」の項目を定めたり、毎月コンプライアンス委員会を開催し身体拘束の有無や事例などについて話し合い職員の理解が深まっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日々の業務の中での声かけなど、お互いに気になることは注意しあっている。また、毎月開催される、コンプライアンス委員会で、事例を用いて虐待防止について学ぶ機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎月行われている、資質向上研修内で、権利擁護に関しての研修も行われている。現在、権利擁護センターやNPO法人の身元保証制度を利用しているご利用者様が入居されている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用開始前に施設の見学（現在は1階のみで、フロアは写真で提供）や現在の状況、相談等を行う場も受けている。契約の締結時には、重要事項説明書等を用いて文章と口頭でわかりやすく説明し、質疑も行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族には月1回のお手紙、面会時や電話で状況を報告し意見を聞いている。また、介護計画の更新の際に、ご家族から要望や意見を聞き、介護計画に反映している。ご利用者様からは、普段の会話からさり気無く思いを聞き取るようにしている。	利用者の意見・要望は、日頃の声かけや介護の中で把握に努めている。家族には毎月お便りを出して利用者の状況を知らせている。家族の意見などは面会時や介護計画の見直し時などで把握し、リーダー会議などで検討して運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回開催されるリーダー会議で、法人の事務長、施設長が参加し、法人としての意見を直接求める場がある。職員からの要望はフロア会議で取り上げ、リーダー会議で検討している。また、フロア会議には管理者も参加し直接職員の意見を聞くことができる。	職員は日常の業務や介護対応などから、業務上の問題点や要望などを見つけ、ユニット会議やリーダー会議などで報告し意見を表明している。リーダー会議には法人の事務長、施設長が参加し、法人としての職員意見などの把握に努め、法人・施設の運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格習得支援制度を設けている。実際に資格を取得し職員が向上心をもって働けるようにしている。また、役職や保有資格に応じた給料制度を設けており、年に2回自己評価表を作成する事で、職員自らを評価する機会も設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回の資質向上研修を様々なテーマで開催している。外国人の職員には少人数での研修を開催している。外部研修へは、グループ会社で開催されている研修に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、グループ会社で行われている管理者会議にZOOMで参加し、会議の中で行われる研修で、他事業所の管理者と意見交換をしている。職員は外部研修に参加することで交流する機会を設けている。		
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用申し込みの際に、ご本人やご家族から現在の状況をお聞きするとともに、ご本人からも施設での生活の中で、やりたいことや困りごとなどを伺うようにしている。利用開始後は、普段の会話から要望など把握するように努めている。また、ご利用者様毎に担当職員が決まっており、担当職員を中心に関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申し込みの際に、ご本人やご家族から現在の状況とともに希望や要望、生活習慣などお聞きしている。また、利用開始後も定期的に家族への連絡などを行い、日々の様子など伝え安心感をえられるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用開始前の面談で、ご本人の状況とご本人やご家族の要望などとのすり合わせを行い、必要に応じて福祉用具の検討、訪問マッサージや医療面での支援など介護保険外のサービスなども検討するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中で、ご利用者様に役割をもっていたり、ご自身が誰かの役に立っているんだという意識をもてるように支援している。また、仲の良いご利用者様での小さなコミュニティを作り、ご利用者様同士の関係性作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	往診などや日々の変化など、随時報告し相談している。月に1度の写真付きの手紙で、施設での暮らしの様子をお伝えしており、また、ご利用者様自身がご家族様へお手紙を送られている。 コロナ禍の為、施設の玄関先で行われる面会の際に職員が同席する場面もあり関係性を築ける機会となっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍であり、馴染みの人に会いに行く、馴染みの場所に行くことが出来ていないが、ご家族様にお願ひし馴染みの関係のある写真をお持ちいただくことがある。	コロナ禍の状況下では、知人などの面会や馴染みの場所への訪問が感染予防のため制限されている。そのため、出来る範囲の工夫として、家族に馴染みの関係のある写真をお願ひして、関係の維持や話題づくりに活用し関係が途切れないように努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入り会話ができるようにしている。レクリエーションや家事活動を行う際にも、職員を交えてお互いが話し合いながら行えるようにしている。また、ご利用者様同士がくつろげるようにソファの位置に配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了(退居)時、家族の相談に応じながら、情報の提供や、家族と一緒に同行するなど不安なく移行できるように支援している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用前の本人の生活歴や趣味活動、家族の意向などから思いを把握し、利用後の生活の中で反映できるように努めている。法人が変わる前からご利用されている方に関しては、新たにご家族様に伺うようにしている。	利用前の生活歴や趣味、家族の意向や利用後、利用者との日々の何気ない会話やふれあいの中から新たに気づいた話題や特技、行動特性などから暮らしの希望、意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス利用の経緯については、利用開始前の家族や本人からの聞き取りで把握している。利用開始後は、今まで自宅で使用していた馴染みの家具や食器類、写真など持参してもらう事で不安なく利用が開始できるように強めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご利用者様一人一人に担当の職員を設けており、担当職員が責任をもって関わり、情報を把握し申し送りノートを活用し情報を他の職員へ発信している。また、毎月のユニット会議の場で、全ご利用者様の情報共有を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご利用者様個別の介護記録(iPad)に、日々の状況を詳細に記入するとともに、毎月行われるフロア会議やモニタリングを定期的に行い介護計画の生かしている。	利用者の介護記録(iPad)に日々の状況が記載され、毎月の会議、3ヶ月ごとのモニタリング、6ヶ月毎の見直しに生かしている。介護計画は利用者、家族の要望を取り入れ担当職員、計画作成者、医師、看護師などで話し合い作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録やバイタル表、申し送りノートなどに日々気づいた事などを記録し、それらをもとにフロア会議で話し合い実践につなげている。また、日々気づいたときにその場に居る職員で話し合情報共有し、介護計画につなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人の状態の変化が現れた際には、職員からの情報を集めご本人とご家族の意向を伺い話し合い、介護サービス以外のサービス利用や専門医の受診など対応するように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの状況を確認しながら、生活の中で天気の良い日には近くの公園や神社に散歩へでかけている。地域との交流は図れておらず支援できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日常生活での健康管理は、往診に来ている提携医によるものであるが、本人や家族の要望や状況に応じて、入居前からのかかりつけ医に受診できるように支援している。	ホームの提携医による往診が毎週あり、歯科、リハビリなどの往診もある。入居前からのかかりつけ医や眼科を希望する利用者には、家族と協力して受診支援をしている。看護師が健康管理を行い、必要に応じて医師、家族との連絡をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日バイタルや食事や水分の摂取量、排泄などの観察を行い、普段と違う様子の場合は、訪問医やかかりつけ医、往診医の看護師などへ相談しスムーズな受診ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはご本人の情報、往診医からの診療情報提供書も併せて提供している。入院生活時に必要な物品を病院まで持参している。また、入院中に管理者は家族や病院関係者と話をする機会を設け、退院後の生活が円滑に進ようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用契約時に、ご本人・ご家族から重度化した場合や終末期の過ごし方を確認している。その様な状態になった際に、再度ご家族様の思いに沿った終末期を迎えられるように努めている。往診医から病状の説明をご家族ご家族様、職員も聞き、安心して終末期を迎えて頂けるよう支援している。	利用契約時にターミナルケアについて説明し理解を得ているが、重度化した場合には、改めて家族との話し合いや主治医の意見聴取などを行い、終末期の方針決定を行っている。今年度はホームで2名の看取りを行った。看取り後、振り返りを行い家族の協力、職員研修、医療連携など今後の支援に活かすようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変した場合の対応の仕方などの勉強会を開催しており、緊急時のフローチャートを作成している。また、普段とご様子の違う場合には、速やかに家族へ連絡し受診の相談をしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	近隣にある消防署の協力をえて、火災や水害などの想定避難訓練を夜間想定も含めて年に2回行う予定。設備としても防火扉やスプリンクラーの設置、備蓄の確保もおこなっている。	津波・火災等の各種災害について、いろいろのケースを想定し、職員の役割分担などの防火体制整備を進めている。定期的(年2回)に防災訓練を実施している。マニュアルや災害備蓄(3日分)などにも配慮し、施設の防火扉・スプリンクラー設備・消火器などの定期点検なども行っている。コロナ禍で地域の合同訓練はできないが、法人の事務長が地域の消防団員でもあり地域との協力体制は構築されている。	近い将来東海地震が想定され海も近いので津波対策を絶えず職員間で話し合いされたい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴や排泄介助時などを中心に、プライバシーを損ねないような声掛けを常に気を付けている。	笑顔と安心をお届けするサービスを合言葉に、利用者の誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応に常に留意し行動している。特に入浴の同性介助や排泄支援時の声掛けなどには注意をして対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、自立した生活が出来るように支援している。みなとの態での自立支援は理念として掲げている。ご本人様の意向を聞き支援につなげている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	時間やタイムスケジュールを中心に動くのではなく、ご利用者様の体調や気分に合わせて時間を変更するなどの対応もしている。危険が伴わない限り、なるべく自由に過ごしていただける環境作りを心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月1回ホームに来る訪問美容でヘアースタイルや毛染め、パーマを希望された方は利用されている。着替えに関しても季節に沿った服が身に掛けられるように支援している。化粧水やクリームなども好みで持参して頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事のメニューに関しては、グループ会社が契約してる業者から送られてくる。ご利用者様がメニューを決める事はできないが、レクリエーションの一貫として、食事レクやおやつレクを企画し、好みのものを提供する機会を設けている。その際はご利用者様も一緒に出来ることを手伝って頂いている。	食事はグループ会社契約の業者からメニューに基づき送られてくる。毎日、職員と利用者が協力して配膳、片付けなど行い、行事食、おやつレクなどは好みのものが提供され、一緒に調理を手伝い楽しみになっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分や食事摂取量をチェックし、ご利用者様の状態に合わせた食事形態やとろみをつけるなど、ご本人の状態にあった形で提供している。必要に応じて、往診医に努める管理栄養士の栄養指導を受けることができる。体重測定も毎月行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、準備や声かけをして歯磨きが行えるようにしている。自己にて行えない方は介助で行っている。入れ歯の方は夜間帯に洗浄剤を使用し消毒している。訪問歯科医による診療や、歯科衛生士による口腔ケアの指導を受け支援している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作成し排泄パターンを把握するように心がけている。定期的な声かけや誘導など行い可能なかぎりトイレでの排泄を心掛けている。職員間で話し合い、リハビリパンツの使用を布の下着へ変更するなど、その方の能力に合わせた下着や排泄用具の支援をしている。	利用者個々の状況に合わせて、排泄チェック表を作成し、排泄パターンリズムを把握し排泄の自立に向けた支援を実施している。リハビリパンツの使用を布の下着に変更するなど自立を目指している。また、排泄の失敗があった場合は速やかに着替えの交換などの支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄の記録や水分摂取量をチェックし、水分摂取量の少ない方には、お茶やポカリスエットをゼリーにして提供している。また、滞りなく排便ができるように往診医に相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個浴となっており本人の体調や状況に応じて対応をしている。入浴日と決めてしまうのではなく、今日は入れなければ明日入るなど、個々の支援が出来ている。	週3～4回の個浴が基本であるが入浴日を決めるのではなく本人の体調や状況に応じて支援している。時間帯などでもできる限り利用者の希望に沿うよう対応し、季節湯も実施している。また脱衣室も床暖房になっており冬も快適で安全である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間、利用者の状況に応じて個別に横になる時間を設けたり、シーツ交換を定期的に行うなどして気持ちよく眠れるように支援している。法人が変わり、施設で決められた寝具ではなく、入居時にご自身の寝具をお持ちいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎週一回の往診を受け、2週間ごとに処方された服薬の管理を行っている。ご利用者様が変わり職員が薬の説明を受け、薬剤師とも情報の共有を行っている。処方薬に変化があった場合は情報を共有し確実に服薬できるように個別に対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日課として家事活動を役割として行っている。また、利用開始前から行っていた趣味活動など行えるように支援している。コロナ禍で散歩に出かける機会が少なく、1階の事務所や玄関まで散歩や、歩行訓練、気分転換目的で行くことがある。その際、廊下のソファに座り、皆さんでお菓子を食べるなどの楽しみの提供をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	生活の中では近くにある神社や公園に散歩に行くことや、家族からの希望で外出を行えるようにしているが、コロナ禍の為、具体的な支援は行えていない。	コロナ禍の影響を一番受けているのが外出支援である。感染予防に留意し、三密の環境を避け、なんとか毎日短い時間でも外出できるように努力している。日常的な外出はホーム近隣の神社や公園の散歩に限定されるが、日光浴をしながら楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が金銭を管理している方はいないが、コロナになる前は、ご希望があれば近隣や移動販売時に買い物へ行き、好きな物を選んで購入できるようにしていた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの要望で携帯電話を所持しているご利用者様がいる。家族と直接連絡をとったり、定期的に家族から電話がありつないでいる。毎週日曜日に息子様から電話がかかってくるご利用者様もいる。また、家族から毎日手紙が届くご利用者様もおられ、お誕生日プレゼントが届いた際は、お礼の電話をかけるなどの支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアにある大きな窓から光が差し込み、フロア全体を明るく照らしている。また、ご利用者様は、その窓から見える景色を楽しんでいる。フロアには利用者と職員と一緒に作った季節ごとの手作りの作品が飾られている。	5階及び6階の各フロアの共用空間は広く明るく清潔で、トイレの配置も全体から見えずプライバシーに配慮している。フロアにある大きな窓は、採光や景色もすぐれており、また、臭いや温度調整なども適切に管理され、居心地の良い空間になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアにはTVやソファがおいてあり、ご利用者様同士でTVを見ながらゆったりと過ごすことや、会話ができている環境が作られている。また、ご利用者様は自由に居室とフロアを出入りができるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、家族の協力のもと自宅で使用されていた物をもってきていただくようにしている。また、本人が居室の出入り口に名札を取り付けた り、好みに応じてのれんを使用したりして自分の居室である事を認識できるようにしている。	各居室には表札が掲げられ、自室が分かるように工夫されている。部屋には自宅で使用していた馴染みの品や家具・手回り品などの持ち込みがなされ、利用者ごとに自分らしい居室空間が構成され、安心して心地よく暮らせる工夫がなされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアの出入り口は施錠しておらず、また、ドアが引戸になっており自身で自由に開閉できるようになっている。ホーム内の作りも手すりを取り付けられており、自らがつかまり歩けるようになっている。		

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2391100308		
法人名	社会福祉法人フロンティア		
事業所名	グループホームみなとの憩		
所在地	愛知県名古屋市港区名港一丁目6番1号		
自己評価作成日	令和4年1月1日	評価結果市町村受理日	令和4年6月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;jiqyosvCd=2391100308-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;jiqyosvCd=2391100308-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人福祉サービス評価センター
所在地	名古屋市中川区四女子町1-59-1-902
訪問調査日	令和4年4月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昨年の4月から法人が変わっているが、フロアの職員は殆ど変わっていないことから、今までのグループホームでの暮らしの継続が出来ている。法人が変わったことによる不安や心配の軽減にも繋がっており、ご家族様との信頼関係にも繋がっている。

早朝、東側の大きな窓からは朝日が差し込みホームの向かい側にある神社の緑とのコラボレーションが楽しめる。また、その神社や近くの公園が散歩コースとなっている。フロアでは体操や食事の盛り付けや後片付け、洗濯物たたみ掃除など家事活動を日課としている。また、おやつレクやパズルや編み物などの個別レクも行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは特別養護老人ホームを併設した複合型施設内にあり、2021年4月から運営法人が、社会福祉法人フロンティアに交代した。ホームの名称も「グループホームみなとの憩」に変更したが、管理者や職員、そして、利用者もそのまま引き継がれ運営上の大きな変化や支障は見られず、家族の不安や苦情もなかった。今年度は感染拡大の影響で力を入れている地域との交流が出来なかった。コロナ禍後には管理者は認知症のキヤラバン・メイトで地域の人々への認知症理解促進のための講座開催をめざしている。法人の事務長は、元県会議員で現在は地域の消防団員でもあり、地域情報も収集できおり交流の拡大が見込まれる。外出は社会との繋がりを維持するため、重要であり、コロナ禍においても自由に出入るように、玄関の施錠は行わず、見守り対応に取組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	令和3年4月に既存の施設をそのまま新規申請し、新たな理念を掲げることなく過ぎてしまった。この機械に新たな理念を掲げた。まだ共有や実践につなぐことはできていない。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人の事務長が地域で暮らしており地域の一員となっている。法人が変わり地域とのつながりを再構築する必要があるが、コロナ禍である現状で日常的な交流は図れていない。近くの神社や公園に散歩にいかれ、地域の方と挨拶を交わすなどの交流は図れている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の管理者が、認知症介護指導者であり、また認知症キャラバン・メイトである。その実践はあるが、地域の人々に向けて活かされていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、書面での開催となっており、評価への取組や状況とへの報告や話し合いができていない。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	区の保護係や、いきいき支援センター等、入居の相談や入居されている方の報告を適時行っている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	フロアや施設の玄関のドアは施錠をしない介護を行っており、利用者は自分の意思でフロアから出ることができる。毎月コンプライアンス委員会を開催し、その場で身体拘束の有無について話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日々の業務の中での声かけなど、お互いに気になることは注意しあっている。また、毎月開催される、コンプライアンス委員会で、事例を用いて虐待防止について学ぶ機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎月行われている、資質向上研修内で、権利擁護に関しての研修も行われている。現在、権利擁護センターやNPO法人の身元保証制度を利用しているご利用者様が入居されている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用開始前に施設の見学（現在は1階のみで、フロアは写真で提供）や現在の状況、相談等を行う場をも受けている。契約の締結時には、重要事項説明書等を用いて文章と口頭でわかりやすく説明し、質疑も行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族には月1回のお手紙、面会時や電話で状況を報告し意見を聞いている。また、介護計画の更新の際に、ご家族から要望や意見を聞き、介護計画に反映している。ご利用者様からは、普段の会話からさり気無く思いを聞き取るようにしている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回開催されるリーダー会議で、法人の事務長、施設長が参加し、法人としての意見を直接求める場がある。職員からの要望はフロア会議で取り上げリーダー会議で検討している。また、フロア会議には管理者も参加し直接職員の意見を聞くことができている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格習得支援制度を設けている。実際に資格を取得し職員が向上心をもって働けるようにしている。また、役職や保有資格に応じた給料制度を設けており、年に2回自己評価表を作成する事で、職員自らを評価する機会も設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回の資質向上研修を様々なテーマで開催している。外国人の職員には少人数での研修を開催している。外部研修へは、グループ会社で開催されている研修に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、グループ会社で行われている管理者会議にZOOMで参加し、会議の中で行われる研修で、他事業所の管理者と意見交換をしている。職員は外部研修に参加することで交流する機会を設けている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用申し込みの際に、ご本人やご家族から現在の状況をお聞きするとともに、ご本人からも施設での生活の中で、やりたいことや困りごとなどを伺うようにしている。利用開始後は、普段の会話から要望など把握するように努めている。また、ご利用者様毎に担当職員が決まっており、担当職員を中心に関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申し込みの際に、ご本人やご家族から現在の状況とともに希望や要望、生活習慣などお聞きしている。また、利用開始後も定期的に家族への連絡などを行い、日々の様子など伝え安心感をえられるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用開始前の面談で、ご本人の状況とご本人やご家族の要望などとのすり合わせを行い、必要に応じて福祉用具の検討、訪問マッサージや医療面での支援など介護保険外のサービスなども検討するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中で、ご利用者様に役割をもっていたり、ご自身が誰かの役に立っているんだという意識をもてるように支援している。また、仲の良いご利用者様での小さなコミュニティを作り、ご利用者様同士の関係性作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	往診などや日々の変化など、随時報告し相談している。月に1度の写真付きの手紙で、施設での暮らしの様子をお伝えしており、また、ご利用者様自身がご家族様へお手紙を送られている。コロナ禍の為、施設の玄関先で行われる面会の際に職員が同席する場面もあり関係性を築ける機会となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍であり、馴染みの人に会いに行く、馴染みの場所に行くことが出来ていないが、ご家族様にお願いし馴染みの関係のある写真をお持ちいただくことがある。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入り会話ができるようにしている。レクリエーションや家事活動を行う際にも、職員を交えてお互いが話し合いながら行えるようにしている。また、ご利用者様同士がくつろげるようにソファの位置に配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了(退居)時、家族の相談に応じながら、情報の提供や、家族と一緒に同行するなど不安なく移行できるように支援している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用前の本人の生活歴や趣味活動、家族の意向などから思いを把握し、利用後の生活の中で反映できるように努めている。法人が変わる前からご利用されている方に関しては、新たにご家族様に伺うようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス利用の経緯については、利用開始前の家族や本人からの聞き取りで把握している。利用開始後は、今まで自宅で使用していた馴染みの家具や食器類、写真など持参してもらう事で不安なく利用が開始できるように強めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご利用者様一人一人に担当の職員を設けており、担当職員が責任をもって関わり、情報を把握し申し送りノートを活用し情報を他の職員へ発信している。また、毎月のユニット会議の場で、全ご利用者様の情報共有を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご利用者様個別の介護記録(iPad)に、日々の状況を詳細に記入するとともに、毎月行われるフロア会議やモニタリングを定期的に行い介護計画の生かしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録やバイタル表、申し送りノートなどに日々気づいた事などを記録し、それらをもとにフロア会議で話し合い実践につなげている。また、日々気づいたときにその場に居る職員で話し合情報共有し、介護計画につなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人の状態の変化が現れた際には、職員からの情報を集めご本人とご家族の意向を伺い話し合い、介護サービス以外のサービス利用や専門医の受診など対応するように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの状況を確認しながら、生活の中で天気の良い日には近くの公園や神社に散歩へでかけている。地域との交流は図れておらず支援できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日常生活での健康管理は、往診に来ている提携医によるものであるが、本人や家族の要望や状況に応じて、入居前からのかかりつけ医に受診できるように支援している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日バイタルや食事や水分の摂取量、排泄などの観察を行い、普段と違う様子の場合には、訪問医やかかりつけ医、往診医の看護師などへ相談しスムーズな受診ができるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはご本人の情報、往診医からの診療情報提供書も併せて提供している。入院生活時に必要な物品を病院まで持参している。また、入院中に管理者は家族や病院関係者と話をする機会を設け、退院後の生活が円滑に進ようようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用契約時に、ご本人・ご家族から重度化した場合や終末期の過ごし方を確認している。その様な状態になった際に、再度ご家族様の思いに沿った終末期を迎えられるように努めている。往診医から病状の説明をご家族ご家族様、職員も聞き、安心して終末期を迎えて頂けるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変した場合の対応の仕方などの勉強会を開催しており、緊急時のフローチャートを作成している。また、普段とご様子の違う場合には、速やかに家族へ連絡し受診の相談をしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	近隣にある消防署の協力をえて、火災や水害などの想定避難訓練を夜間想定も含めて年に2回行う予定。設備としても防火扉やスプリンクラーの設置、備蓄の確保もおこなっている。		
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴や排泄介助時などを中心に、プライバシーを損なわないような声掛けを常に気を付けている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、自立した生活が出来るように支援している。みなとの憩での自立支援は理念として掲げている。ご本人様の意向を聞き支援につなげている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	時間やタイムスケジュールを中心に動くのではなく、ご利用者様の体調や気分に合わせて時間を変更するなどの対応もしている。危険が伴わない限り、なるべく自由に過ごしていただける環境作りを心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月1回ホームに来る訪問美容でヘアカットや毛染め、パーマを希望された方は利用されている。着替えに関しても季節に沿った服が身に着けられるように支援している。化粧水やクリームなども好みで持参して頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事のメニューに関しては、グループ会社が契約してる業者から送られてくる。ご利用者様がメニューを決める事はできないが、レクリエーションの一貫として、食事レクやおやつレクを企画し、好みのものを提供する機会を設けている。その際はご利用者様も一緒に出来ることを手伝って頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分や食事摂取量をチェックし、ご利用者様の状態に合わせた食事形態やとろみをつけるなど、ご本人の状態にあった形で提供している。必要に応じて、往診医に努める管理栄養士の栄養指導をうけることができる。体重測定も毎月行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、準備や声かけをして歯磨きが行えるようにしている。自己にて行えない方は介助で行っている。入れ歯の方は夜間帯に洗浄剤を使用し消毒している。訪問歯科医による診療や、歯科衛生士による口腔ケアの指導を受け支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作成し排泄パターンを把握するように心がけている。定期的な声かけや誘導など行い可能なかぎりトイレでの排泄を心掛けている。職員間で話し合い、リハビリパンツの使用を布の下着へ変更するなど、その方の能力に合わせた下着や排泄用具の支援をしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄の記録や水分摂取量をチェックし、水分摂取量の少ない方には、お茶やポカリスエットをゼリーにして提供している。また、滞りなく排便ができるように往診医に相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴となっており本人の体調や状況に応じて対応をしている。入浴日と決めてしまうのではなく、今日は入れなければ明日入るなど、個々の支援が出来ている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間、利用者の状況に応じて個別に横になる時間を設けたり、シーツ交換を定期的に行うなどして気持ちよく眠れるように支援している。 法人が変わり、施設で決められた寝具ではなく、入居時にご自身の寝具をお持ちいただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎週一回の往診を受け、2週間ごとに処方された服薬の管理を行っている。ご利用者様により職員が薬の説明を受け、薬剤師とも情報の共有を行っている。処方薬に変化があった場合は情報を共有し確実に服薬できるように個別に対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日課として家事活動を役割として行っている。また、利用開始前から行っていた趣味活動など行えるように支援している。コロナ禍で散歩に出かける機会が少なく、1階の事務所や玄関まで散歩や、歩行訓練、気分転換目的で行くことがある。その際、廊下のソファに座り、皆さんでお菓子を食べるなどの楽しみの提供をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	生活の中では近くにある神社や公園に散歩に行くことや、家族からの希望で外出を行えるようにしているが、コロナ禍の為、具体的な支援は行えていない。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が金銭を管理している方はいないが、コロナになる前は、ご希望があれば近隣や移動販売時に買い物へ行き、好きな物を選んで購入できるようにしていた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの要望で携帯電話を所持しているご利用者様がいる。家族と直接連絡をとったり、定期的に家族から電話がありつないでいる。毎週日曜日に息子様から電話がかかってくるご利用者様もいる。また、家族から毎日手紙が届くご利用者様もおられ、お誕生日プレゼントが届いた際は、お礼の電話をかけるなどの支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアにある大きな窓から光が差し込み、フロア全体を明るく照らしている。また、ご利用者様は、その窓から見える景色を楽しんでいる。フロアには利用者と職員が一緒に作った季節ごとの手作りの作品が飾られている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアにはTVやソファがおりてあり、ご利用者様同士でTVを見ながらゆったりと過ごすことや、会話ができてい環境が作られている。またご、利用者様は自由に居室とフロアを出入りできるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、家族の協力のもと自宅で使用されていた物をもってきていただくようにしている。また、本人が居室の出入り口に名札を取り付けたり、好みに応じてのれんを使用したりして自分の居室である事を認識できるようにしている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアの出入り口は施錠しておらず、また、ドアが引戸になっており自身で自由に開閉できるようにしている。ホーム内の作りも手すりを取り付けられており、自らがつかまり歩けるようになっている。		